

ろう者の声

を深く知るために



2020年2月頃から、日本で新型コロナウイルスが流行し始め、マスク着用やソーシャルディスタンスなど、いわゆる新しい生活様式が求められるようになった。中でも、主にコミュニケーションの面で取り巻く環境が大きく変わったといわれているのが、耳の聞こえない・聞こえにくいの方々である。

ろう者が実感するコロナ禍での変化

“ろう者”とは、**手話を第一言語とする** 耳の聞こえない方々の呼称である。

手話には、2つの種類がある。

- ・ **日本手話**：日本語と異なる言語。日本語と語順が違い独自の文法を持っていて、ものの形を詳しく伝える表現などが特徴。
- ・ **日本語対応手話（手指日本語）**：日本語を手や指で表したもので、主に難聴者や日本語を習得した人が使う。日本語を話しながら手話をつける人が多いが、声をつけない人もいる。

今回の取材は、声なし手話で行った。

ろう者の大学生 鎌本さんは、**マスクを外すことができない状況で、口の形や表情といったコミュニケーションの大切な要素がまったく見えなくなる、人との距離を保つために困った時に助けを求めることもしにくくなる**といった**困難さ**を感じているという。

そしてコロナ禍でのろう者への影響は、コミュニケーションの面以外にも及んでいる。

取材に応じてくださった西脇さんは、**コミュニティが孤立しがちになってしまうことで、手話を使う場所がそれぞれに散ってしまい“ろう文化”がなくなることに繋がる**と話す。

《ろう文化の一例》（西脇さんへの取材）

- ・ 肩を叩いたり、机や床を叩いて、振動で相手を呼ぶ。
- ・ 大勢の人数がいて、全員に注目してほしい時は部屋の電気を点滅させて相手を呼ぶ。
- ・ 結論から、比較的ハッキリと伝えることが多い。

“「言語」とは、音声言語及び手話その他の形態の非音声言語をいう。”

※出典：障害者の権利に関する条約 第2条 定義

一方で、コロナは良い変化ももたらした。

お二人はそれぞれ、**おうち時間もあり SNS に手話について触れている動画があがっていたり、東京都知事の記者会見によって、手話通訳に対する関心が高まった** というように手話への注目度があがった実感と嬉しさを話してくださった。

そのときの表情がとても印象的で、メディアの種類に関わらず、発信すること・届くことの魅力を改めて感じた。

字幕にはない、言葉の伝える力

そんな中、オリンピック閉会式・パラリンピックの開閉会式の手話の通訳者が話題となった。私も自宅で見ていた。

画面が逆L字型に区切られ、外側に通訳者の方が立たれていて、これまでの会見などに比べ、手話を大きくきちんと見られる放送だった。

実はオリンピックの開会式の時点では、会場の中のみ通訳が行われており、テレビ放送での通訳は行われていなかった。それに対し、当事者を含め多くの声があがり、8月4日「全日本ろうあ連盟」は改善を求める要望書を提出した。その結果、Eテレで8月5日の深夜、通訳つきで開会式の模様の再放送と、オリンピック閉会式・パラリンピック開閉会式の通訳つきの生放送が行われることになった。

手話通訳をつける意義として、鎌本さんは「**字幕はトーンがなく、今の雰囲気やイメージが伝わりづらいこと**」をあげてくださった。

《トーン》という言葉は、ひとことでとても腑に落ちる表現だった。

立場は異なるが、私自身、難聴のためテレビには常時字幕をつけている。

映像に合わせリアルタイムで手話を見る経験はその時が初めてだった。

それでも手話を見ていて、ろう通訳者さんの表情も含めて、あたたかみのような話の内容以外の言葉で表せないものも伝わってきて、心地よさを感じた。

全て理解できるわけではないが、字幕を追う意識からも解放され安心感があつた。

「#手話の人」裏側にあった連携技術

今回は、これまでの通訳とは違い、「ろう通訳」という方法で放送された。

「ろう通訳」と聴者の通訳「手話通訳」の違いについて、鎌本さんは

**「ろう通訳」は、ろう者に伝わりやすい手話かどうか考えられているイメージ、
「手話通訳」は、情報が伝わるイメージ** だと語る。

《ろう通訳のしくみ》

参考：2021年9月12日放送Eテレ「こども手話ウィークリー」

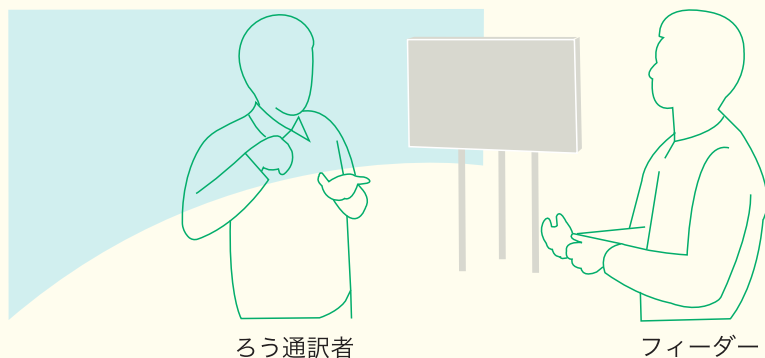
「ろう通訳」とは、ろう者による手話通訳のことで、話の内容を「フィーダー」と呼ばれる聴者の通訳者が手話に通訳し、それをろう者が通訳するという、連携が最も重要になるしくみだ。

フィーダーが訳した音声や音の情報を、ろう通訳者がろう者に伝わる手話に変えて通訳する。

例えば、パラリンピックの開会式の選手入場のアナウンス『アメリカ合衆国！』という声。

フィーダーは「アメリカ」と、単語など必要な内容のみを簡潔に伝えるが

ろう通訳は、『アメリカ合衆国の入場です！』という手話とともに、たくさんの選手が列をなして入場する様子も表現されていた。



ろう通訳者は、フィーダーが話す手話と会場の映像が映し出されたモニターを見ながら通訳する。

—より多くの人に手話が広まったと思いますが、これからに向けて知ってほしいことはありますか？—

鎌本さん：「ろう者でも聴力や言語、環境が異なるため色々なろう者がいることを知ってもらいたいです。
障害者という見方ではなく同じ立場に立ってコミュニケーションしたいです。」

西脇さん：「ろう者はかわいそう残念ではなく、ろう文化があり、日本手話という言語がある。
いわゆる言語的少数派であることを知ってほしいです。」

手話で話していると自分の感じたことを言葉に“のせる”という感覚になり、

手話を見ると、その人がどんな人なのか深く伝わってくる。

「嬉しい」という一言をとっても、感じ方の数だけ少しずつ違う表現があることが伝わってくる。

手話という言葉がもつ豊かさを感じた時間になった。

私は、上肢に先天性の麻痺がありスムーズに動かすことができないため、伝わりづらい部分も多々あったのではないと思う。それでもお二人とも自然体のまま、私が伝えたいことを知ろうとする柔らかな気持ちをもって答えてくださった。

最近は多様性という言葉をよく耳にする。

取材を通じて、立場の異なる人々の違いを“認めること”とともに、それぞれが“心地よく過ごせるかどうか”という視点に転換していく重要性を感じた。

後者の視点に立って現状が見直され、必要な改善がされた後にやっとそのスタートラインに立つと言えると思う。相手を知ろうとする心持ちと、一過性の話題で終わらずに、その先の相手の声とその背景を学んでいく姿勢を持つこと。

当たり前のことかもしれないが、改めてひとりひとりが強く意識すべきことなのではないだろうか。

(2021.9.14 文・イラスト / 藤倉千裕)

《参考文献》

特定非営利活動法人 バイリンガル・バイカチュラルろう教育センター

「手話の種類？」

〈<https://www.bbed.org/kikoe/parenting/type>〉

2021年9月14日 閲覧

*表紙のイラストは、「手話」の手話です。